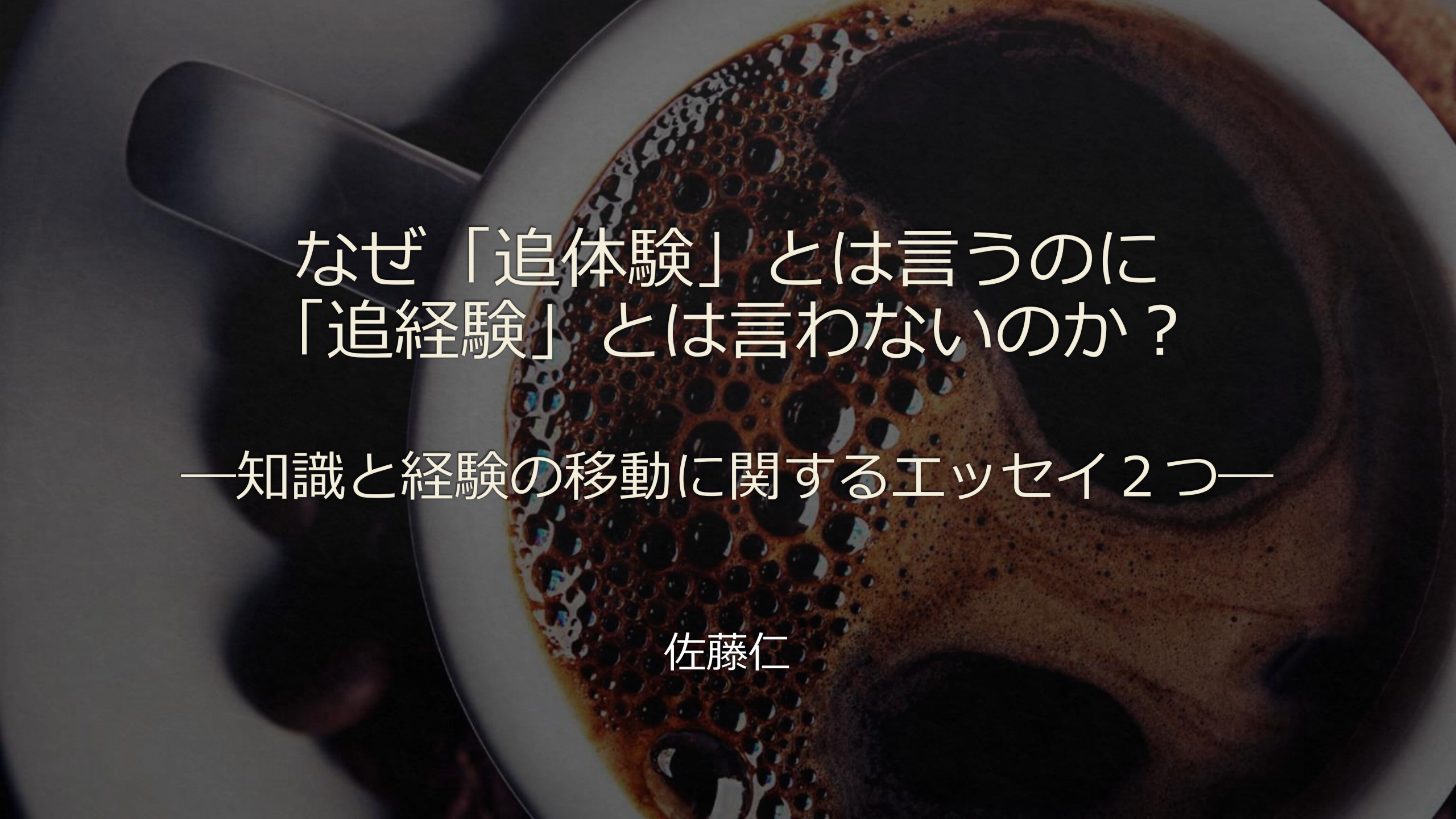




なぜ「追体験」とは言うのに 「追経験」とは言わないのか？

—知識と経験の移動に関するエッセイ2つ—

佐藤仁

白人が砂の上に小さな円を描いて、「これがインディアンの知っている範囲」という。次にそのまわりに大きな円を描いて、「これが白人の知っている範囲」という。

するとインディアンは両方の円よりもさらにずっと大きな円をその外に描いて、「ここは白人も赤い人も何も知らない範囲」とやり返したという。

"Circles" by Carl Sandburg

「赤い人」の円は、白人の円に包含されているが、本当にそうか？赤い人は白人には想像もできない、違う次元のことを知っているのではないか？

湯川秀樹「知魚楽」



莊子：魚が悠々と泳いでいる。あれが魚の楽しみだ。

恵子：君は魚でもないのに、どうしてわかる？

莊子：君は僕じゃないのに、僕が魚の楽しみをわかるかどうか、わからないだろう。

恵子：僕は君じゃないから君の心はわからない。でも君だって魚じゃないんだから、魚の楽しみはわからないだろう。

莊子：話の原点に戻ろうよ。君が僕に「君にどうして魚の楽しみがわかるのか」ときいた時に、すでに君は、僕に魚の楽しみがわかっていると思って、僕に問いかけてきたんだよ。僕は橋から眺めて魚の楽しみを察したんだよ。

「おおざっぱに言って、科学者のものの考え方は、（実証をめぐる）両極端の間のどこかにある。全員がどちらかに固執していたら、今日の科学はありえなかった。」

理性と感性

- 実証できなもの（感性の世界）を認めることが、より人間的であるという示唆。
- そうか？ 感性の過信をどう考えるか（「私には途上国の“貧しさ”が分かる」）
- 「わからない」という考え方も、実は相手に対するある種のリスペクトになるのでは？
- 他人の体験を「こう」と決めつけてしまう危険性は、無関心と同じくらい害ではないか。
- **「魚の気持ちがわかる」というロマン・共感力も必要だが、魚の気持ちは分からないという謙虚さも必要**（これも、感性といえど感性）

ひと
他人はどこまで分かり合うことができるのか。

分かり合うためには「言葉」が必要

森有正 「霧の朝」



- ◇ 「言葉には、それぞれ、それが本当の言葉となるための条件がある」
- ◇ 「たくさんのことを覚えても、記憶しても、それが自分の中にそのまま停止しているのであればパッシフ (passif) であり、それを自由に使いこなせるように表現ができるようになったとき、パッシフがアクティブに移ったという。」
- ◇ 表現力の問題よりも「経験」に欠陥がある、という森。

経験と体験の違い

- ◇ 「経験」とは、[・]ものと[・]自己との間に起こる障害意識と抵抗との歴史。
 - ◇ 抵抗と克服の過程を経ていないものは、単なる「体験」
 - ◇ 本当の経験は、正しい理想の上に立つ。だから、越えなくてはならない「障害」が立ち現れる。
- ⇒ 自分は語るに値する「経験」をしていない。だが、理想は立てられるではないか。理想が立てば、そこに向かう自分に（人工的に）障害を打ち立てることもできる。

「追経験」とはいわないのは、なぜか。

それは「経験」に潜む苦悩と、それを乗り越えようとする主体性が、人から人への安易な移転を許さないからかもしれない。

経験 ≡ 真の意味で、自分のものになった体験

経験を語るアクティブな言葉を獲得するために、
各々の理想を高く掲げよ！